
厨二だから何なんだ？

瑠璃@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二だから何なんだ？

【Zマーク】

Z9859

【作者名】

璃瑠@

【あらすじ】

ううん。なんだろうね。一応ラブコメになる・・・・予定です。“元”厨二病と自負している、桐谷 真矢 きりたに しんや が色々とフラグをたてていくお話。・・・まあ、自己満小説なのであしからず。

物語 漆黒と金色の玉笛 (前編)

「んにあはー、んばんわー、おはよー」しゃべる。

瑠璃@です。約何日ぶりかの復帰(せやつ)

とりあえず自分は、厨(の)ことなんてよくわかりません。何が厨(の)で何が厨(の)でないのか。

まあ、あまり気にしないか(軽に読んで
くれば幸いです。

厨二病。俺がそれになつたのは、中学一年生の夏だった。

某忍者マンガの『』の眼を使えるなんて思つていたのは序の口で、他にも自分にはいろんな特殊能力があるなんて思つていた時期が俺にもあつた。

まあ、見るからに不良な高校生に喧嘩を売つて、ぼこぼこにされだから、自分はそんな人間じやなかつたんだと気づかされたのも今じやいい思い出である。

受験も終盤に近づいた中学三年生の一月。

俺はそれまで遊び呆けていた分を取り戻すべく必死に勉強した。

時期的に、目指すは公立一本。

たぶん優秀な幼馴染さんが居なけりや俺は今頃ガチーノになつていただろう。

んで、なんとか志望校に合格。

これから一所懸命頑張ろうなんて意気込んで入学式を迎えて・・・。
・・・ そうだな、俺が何故にこんな長つたらしく過去の黒歴史を語つ
ているかといふと、定番であるクラスでの自己紹介で厨一全快なや
つが居たからだ。

そいつのせいで、頭の奥底に眠っていた昔の記憶がよみがえつてき
たんだよ。

つまり、俺が何を言いたいかといふと、ソレとは絶対にかかわり
たくないことを、大きく声に出して宣言したいわけだ。

・・・・・ 実際にそんな恥ずかしいことはしないけどな。

「ほれ、ソレがさつを語つてた桐谷 真矢くきりたに しんやへ。

俺の親友だ。」

「よし麻樹くあさきへ。一発殴らせろ」

関わらないと決めていたはずのヤツを、早速連れてきやがったコイツは、小学校からの友達、もとい、パシリの、田向 麻樹くひなたあさきへだ。

誰を連れてきたって？言わなくてもわかるだろ。

もちろん、「私の名前はレイブン・マルクス・ルシファー。漆黒の天使の一人である」なんて自己紹介した、とっても痛い女の子を、だ。

見た目は、はつきし言つて可愛い。めちゃくちゃ可愛い。

まるで、テレビに出る女優みたくパツチリした目、黒くて艶やかな長い髪。宝のもちぐされとはこういうことを言つのか。

・・・・まあ、俺の幼馴染には劣るがな。

たぶん、あんな痛い発言をしていなかつたら、今頃クラスの人気者

であろう。特に男子から。

「おい真矢。誰がぱしりだつて？」

「まささらつこみかよ。遅いな、この変態は。

「変態でもねえよーー！」

「いひぬさいなあ・・・・いちいち突つ込むなよ」

「遅いつて言つたのお前だよねーー？」

バンッー！

突然、麻樹が連れてきていたその女の子が机を叩いた。

静まり返る教室。

「私をいつまで待たせる・・・・お前ら、灼熱の業火で焼いてくれようか」

何を非現実的なことを言つてるのだろうかコイツは。

頭大丈夫なのか？

「くつ・・・・・ 言わせておけば・・・・・ 桐谷真矢か・・・・・ 覚悟しておけーーー！」

そつと女の子は立ち去つていつた。

「おいおい真矢。言いすぎじゃないのか？」

「知るか。だいたい、なんで俺のとこに連れてきたんだよ」

「いや、お前と気が合つかなあと思つてさ。だつて真矢も、元厨に
ぐべつーーー？」

「いやあ、今麻樹君のホッペに大きな虫がとまつてたから。メンゴ
メンゴ」

「コイツ、人の黒歴史をこんなとこでバラして何がしたいんだ？

俺にあの女の子と同じような扱いを受けてるのか？

死ねばいいの!」。

「いやいやー死ねって言い過ぎだろー。」

「…………眠いなあ」

「シカトですかー?ちよ、おまつーー。」

「ほりほら、そこの一人静かにしりょ。H.R始めるぞ…………。
つと、観菜佳 みなか は早退か」

担任の小杉がため息をつく。

若いのに白髪があんなにあるなんて……苦労してるんだなあ。

ついでに、あの厨一野郎の名前は観奈花って言つのか。

名字か名前かわからんが、とりあえず覚えて置いてやるわ。

「さあて、ストーカーの存在に気づいたとき、人はどうすればいいのか。1、警察に通報する。2、すみやかに警察に通報する。3、落ち着きながら警察に通報する。……それで、どうしようか」

「…………よく私の存在に気がついたな。もしや真矢は私の仲間ではないのか？」

「…………あ、もしもし警察ですか？」

「永遠なる衝撃 ハターナルインパクト ……」

「ぐわっ！？ 何すんだお前……って、携帯を踏もつとするな！ 壊れるつて……！」

「フフフ…………私の神技 ゴッドスキル をくらつても元気があつあつてるよつだな。やはりお前は……」

なるほど、学校の鞄で思い切り殴るのがコイツの必殺技、永遠なる

衝撃 エターナルインパクト か。

「で、何か用？学校をぼって、わざわざ俺の後をストーカーしてさ」

「わづだな。やはりお前は私の仲間になつてゐる存在のよつだ」

何を言つてゐんだか。

俺は殴られた際に手放した携帯を拾つて、帰宅するために歩き始める。

「ま、待て！……そ、そうだ、私がいいことを教えてやるつー。」

「…………いい」と？

「ああ。…………えつと」

厨二野郎が不意に、困惑とともに寂しげな表情を見せた。

待て待て。その可愛わでソレは反則だろ。

てか、会つて間もないのに何なんだこの状況。

「…………少しだけ、詰問りうかな」

俺がそつぬつと、厨一野郎はにぱあつと笑つた。

くっ・・・・騙されるな俺！アイツの本性は昔の俺なんだ！－

・・・なんか言つて虚しくなつてきた。

まあ、いいや。

そういうえば近くに小さな公園があつたはずだ。

とりあえずそこに行くか。

俺も家になんて帰りたくないし、少しきりこないうちにやつてしまつても問題ないよな。

公園のベンチに腰かけながら、茜色の空を見上げる。

「やめた方が、いいんじやない？」

沈黙はあまり好きじやない。

俺から話題を切り出すことにした。

「・・・・・何を？」

「だから、厨二っぽく振る舞いの」

「…何を言つていいんだ！私は正真正銘の」

「無理してないか？」

俺がそのままいつと、厨一野郎は口を結んで俯くつむいた。

「なんかさ、無理して厨一っぽく振る舞つてる気がしてさ。 . . .
・やつぱり、普通そういうのつて、楽しいからするんだよ」

うん。俺が厨一の時は毎日が楽しかった。

毎日が非現実に染まつていて、いつ異世界とかに召喚されてもいい
よにドキドキしていい、いつ変な能力に目覚めてもこいつは
クワクしながら毎日を送っていた俺からすれば、彼女はおかしいと
ころだらけである。

人によつて差はあると想つたが、暗い表情をしながら厨一の言葉をは
くやつなんてそつそつこなこと思つ。

やつこつキャラクタを演じてゐるなら、仕方ないですねけじや。

俺の勘みたいなやつが、口くち違つて言つただよな。

・ . . . なんか、俺もまだまだ厨一っぽいな。

思わず笑みを零しながら、今日出会った彼女の田を見る。

「もっと楽しもうよ、な?ほら、もしかしたら明日田さんは、本当に不可思議な力が宿ってるかもしれないだろ?」「

「……私は……すでに特別だよ」

俺は、何故に厨二を悪化させるようなことを言ってしまったんだろうか。

会つて間もない女の子こそ。

まあでも、今、彼女が笑っているからよしとするか。

「さて、田も暮れてきたしそろそろ帰るよ。……幼なじみの手料理が冷めるしな」

俺はそつとベンチを立ち上がり、一つ伸びをした。

「……以前、聞いとけばよかつたな」

ふとそつと思つたのは、家に着いてからだつた。

いつもの”とく、幼なじみが作ってくれた晩ご飯を一人で食べながら今日のことを振り返る。

「…………きも」

そしたら妹様の心を抉る一言が飛んできやがった。

自然とにやけてしまっていた頬を引き締め、再び静かな食事に戻る。

姉様がいなくてよかつた。

姉妹がそろつてしまえば、俺のガラスの心は見るも無残に砕けてしまつからな。

まったく、なんでこんなに口ばっかり悪くなつたのか。

妹は俺を一睨みして、二階の自室へ戻つていった。

俺が家に帰りたくない理由は、主にこの一人にあると言つてもいい。

まあ、俺が中学の時、一人のこと無視しまくつてたからな。

中学生特有の照れみたいなもんだつたが、一人が俺に罵詈雑言を浴びせるようになったのはその頃からだ。

自業自得つてやつか・・・・・。

俺は小さくため息をつくと、残りのご飯を口のなかに詰め込んだ。

そして翌日、彼女は学校を休んだ。

まさか俺のせいか？なんて考えてみたけど、うん。

俺のせいだよね。

多少責任を感じた俺は、クラス名簿で彼女の名前を調べて眉根を寄せ

せる。

沖知 観菜佳 おきち みなか 。

今は無き孤児院。沖知院の一人娘の名であった。

沖知院。その場所を、俺はよく知っている。

なぜならば、5歳頃まで俺もその孤児院にいたからだ。

まだ小さかったからその頃のことはよく覚えてないが、ぼんやりとなら思い出せる。

子供たちの笑い声、心が落ち着く木の匂い。

今では跡形もないあの孤児院が潰れた原因は確か、経営者の不幸な事故だったか。

「なあ、ゲーセン行かねえ？」

そんな麻樹の誘いを、俺は丁重に断つた。

「悪いな。今日はバーへなんだ」

「なつー!? お前、いつの間にリア充になつたんだよーーなあ、なあーー！」

「ハツハツハ、君も頑張りたまへ

悔しがる麻樹の姿をエネルギーに変えて、俺は13年ぶりにあの孤児院跡地へ行つてみることにした。

今日休んでいる彼女が、なんとなくその場所にいるような気がするんだ。

ちなみに、俺がリア充になつたなんてのは嘘。

生粋の“元”厨二。しかも麻樹の影響でアニメにはあはあするようになつてしまつた俺なんかに彼女が出来るわけないだろ？

別に泣いてなんかないし！俺は魔法使いになるんだからなつ！！

「何言つてんだか・・・」

自分で自分に呆れて、小さく苦笑する。

なんか楽しいな、こうこうの。

俺は厨二だった頃の気持ちを思い出しつつ、一人微笑んだ。

孤児院の跡地に着いた俺は、懐かしむように『立ち入り禁止』の看板を越えて奥へと進む。

孤児院自体は閉鎖になつたが、その建物は昔のままその場所に建つていた。

「おお・・・・・なんか見覚えあるかも」

まるで探険をしていくような気分で、孤児院の中を歩く。

曖昧な記憶を頼りに、ずんずん奥に足を進めていくと、教会のチャペルのような場所へ出た。

そういえばこんな場所もあつたなあ、と懐かしんでいいと、誰かの寝息のようなものが聞こえてきた。

「・・・・・無防備すぎだろ」

音が聞こえてきた方に行つてみると、例の厨二女がすやすやと眠っていた。

それにしても、なんと可愛い寝顔なのだらうか。

やはうーこんな女の子が厨一発言をするのはもつたいないな。

いや、むしり喜ぶべきなのか？

だつて趣味とか言いそつだし。

でも、俺はすでに厨一は卒業してゐしなあ。。。。。

「・・・・・・わしきから、何ブツブツ言つてゐの?..」

「うおうー?起きたんなら話よー。びつべつしたじやねえか!..」

まさか、今の聞かれてないよな?

俺としたことが、相手が寝ているのをいことこ、色々と呴いてしまつたぜ。

「ふーん。やつぱ、私の仲間だつたんだね、金色の天使ガブリエル」

ガブリエル、だと？…………まさか俺のことなんて言わないよな？

「真矢以外に誰がいるの？」

「俺はもつ厨二病じやねえええ――――」

俺の叫びがチャペルにこだました。

はあはあ・・・・・！こんなに声を出したのはいつぶりだらうか。

「よく、この場所がわかつたね」

彼女、沖知観菜佳は嬉しそうにはにかんだ。

「まあ、俺もこの孤児院出身だからな。名前繋がりで、なんとなくこの場所に来たらお前に会えそつな気がしたんだよ」

それに、昨日公園で説教じみた事言つたのは俺だし。

そんなことをした次の日に学校を休めたら、なんか気持ち悪いし

な。

「…………そう。真矢って、口の出身だったんだ」

「ああ。もしかしたら俺たち、小っちゃい頃はいたことがあるかもな」

俺がそう言つと、彼女は俺の顔をジィーッと見てきた。

「…………ねえ、好きな生き物つて何?」

なんだ唐突に……。

まあ、隠すほどでもないか。

「決まつてるだろ?男が好きな生き物つて言つたら竜 ドラゴン
以外何がいるつていうんだよ」

そんな生物存在しないつて思つたやつ、足の小指をどっかにぶつけ
やがれ。

自慢じゃないが、俺は中学を卒業するまでリアルに竜 ドラゴン
を信じてたんだぞ?

高校生の今も、いたりいなあなんてショッチャう思ひし。

てか、地球は広いんだし、“もしかしたら”つてことあるかもだろ？

居ないなんて、誰が決めつけたんだよ。

・・・・・話が逸れた。

「・・・・・クスッ・・・・うふ。やつぱりね

笑われただと！？厨一で、自称天使のコイツに笑われる俺つて・・・
・。

「そ、うだ。今田から、真矢には私の本当の名を呼ぶことを許可しよ
うかな」

「・・・・・あ？」

彼女はそつと、チャペルのメインステージ。

新郎と新婦が誓いをたてるその場所へかけて行つた。

そしてその場所で、右足を軸に身体を反転させて俺の方を振り向く。

窓から入つてくる光が、彼女の黒く綺麗な髪を照らす。

その姿を言葉で表現するなり、まさこ“天使”といつ言葉がピッタリであった。

「私の名前は沖知観菜佳。真矢、私と友達になつてくれますか？」

「…………よひこんで」

不意にときめいてしまつたのは内緒である。

こうして俺は、高校に入学した翌日になつと変な女の子、沖知観菜佳と友達になつたのであった。

「よし、仲間を探しに行こう」

高校生初めての中間試験が迫る5月の終り頃。

沖知観菜佳こと、我らがルシファー様はそう直言いやがった。

なぜかあの日以来、コイツは俺につきまとうつになつた。

本人曰く、友達だから当たり前、らしいが・・・・・・違つよな
普通。

まあ、この観菜佳に普通を求めるのは酷だよな、うん。

てか、前より厨二が酷くなつつあるのは何故だ？

まったく意味がわからん。

「ブツブツ言つてないで、どうなんだガブリエル」

ひつ。

「おーおーガブリエル君。団長みたいな」と言いやがつて。

「おーおーガブリエル君。ルシファー様の意に従ふのか?」

「麻樹は死ね。今すぐ死ね」

そして、一番の問題は、なぜか麻樹の野郎が観菜佳の側についていることである。

理由?俺をいじるのが樂しいらしい。それに、観菜佳とあわよくば恋仲にならうと考えているんだとか。

確かに観菜佳は可愛いが、見てて性格の悪さに気づかないのかね。

特に最近の我が儘っぷりは、本当に涼宮ハーヒを彷彿とさせやがる。

リアルにツンデレはいらねえんだよ。

「ルシファー様あー。ガブリエルが虜めるうー

「ナメクジ。放課後、ガブリエルを連れて校門前に集合だからね」

そう言い残して観菜佳は自分の席へ戻つていった。

そろそろ朝のHR始まるしな。

てか麻樹よ。ナメクジなんて呼ばれてよく平気だな。

「あ？いや、俺あだ名なんかつけられたの初めてだからな。少し嬉しいかなって」

「何言つてんだ。お前には現実と幻想の境がわからないＫＹ男、略して、きも男つてあだ名があるじゃねえか」

「いやいや！それ言つてるの真矢だけだ！…つてか、略してる意味ねえよな、ソレ！」

細かい男はモテないんだぞ？

「お前から言われたくねえよ！彼女がいるなんて嘘つきやがつて…」

いや、まあそりゃそうかもだが。

つか、彼女いるなんて言つた覚えなんてないけどな。

リア充になつたつて嘘はついたけど。

「ほりほり。 静かにしらへ。 よし、 今日も全員出席だな

小杉は満足気に頷くと、 HRを開始する号令をかけた。

物語 漆黒と金色の出来事（後編）

えりでしたか？面白くなかったですね、すいません。

不定期更新～。なるべく早めに投稿するよていですが、じつよ
ーくだせえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9859/>

厨二だから何なんだ？

2010年10月10日21時24分発行